○ 展覧会名　竹中美幸展　物語はつづく　Never Ending Journey

○ 会　期　2023 年 2 月 4 日(土) ― 3 月 21 日(火祝)
開館時間 ： 9 時～17 時(入場は 16 時 30 分まで)
休館日 ： 毎週火曜日(祝日を除く)、2/13(月)、24(金)

○ 会　場　大垣市スイトピアセンター　アートギャラリー（学習館 1 階）
（岐阜県大垣市室本町 5-51）

○ 観覧料　無料

○ 開催体制　主　催:大垣市・大垣市教育委員会
運　営:公益財団法人　大垣市文化事業団
協　力:ArtTank

○ お問い合わせ　公益財団法人　大垣市文化事業団　事業課　Tel.0584―82―2310

展覧会について

複合施設、大垣市スイトピアセンターは、1992 年 4 月 5 日に開設され 30 周年を迎えました。このたび、開設 30 周年記念事業として、大垣市出身の美術作家・竹中美幸の個展を開催します。

大垣市で生まれ育った竹中は、美術を学べる高校・大学へと進学し、自分の場所を確認しながら美術作家として活動していきます。美術の道を歩み出してからは、「透明な素材」を用いる表現手法にこだわって制作を続けています。水彩や、樹脂を用いた作品づくりに始まり、かつて映画の現像所で働いていた経験を生かし、2013 年頃よりフィルムを用いた作品を展開し、平面だけではなく、立体的な造形やインスタレーションへと作風を広げてきました。近年の作品では失われゆくモノの形跡をフィルムに焼き付け記録することで、新しい物語を紡ぐ試みをしています。

今回の展覧会では、竹中の故郷での記憶から生まれた近作や奥の細道むすびの地である大垣にちなんだ旅をテーマとした新作、スイトピアセンターの 30 周年にちなんだ新作など、アクリル樹脂やフィルムを素材として使用した平面作品からインスタレーション作品までをご紹介します。

本展は、「透明」を媒介として生まれる、記憶を巡る旅路の物語とも言えます。やわらかな光は、私たちの記憶を揺さぶり、あなただけの新たな物語が生まれゆくでしょう。

展覧会の特徴

○ 地元大垣での初個展開催！！

作者が用いる「透明な素材」に魅了されたのは、幼稚園に通っていた頃に出会ったセロハン製のカーネーションや、小学生の頃に堤防から見たセロハン工場の景色など、大垣での幼少期の体験が現在の表現につながっています。また、今回の展覧会場である大垣市スイトピアセンター—は、幼少期に自身の作品が展示された思い出深い会館でもあり、生まれ育った大垣では初の個展です。

○ 奥の細道むすびの地である大垣にちなんだ新作を展示！

俳聖松尾芭蕉の「奥の細道」は、300 年経った今でも句碑や像が建てられ、その旅路を観光客が訪れており、芭蕉もまた先人の歌枕を追って旅をしていることから着想を得た作品や、「奥の細道」のむすびの地である大垣を主題とした映像による新作を公開します。

○ 本展覧会でしか見られないスイトピアセンター—限定の新作インスタレーション

展覧会場に隣接するプラネタリウム(コスモドーム)で 30 年前のスイトピアセンター—開設当時に上映されていた 70 ㎜フィルム。その後、使用されなくなってから時が止まったように置かれたままになっていたフィルムに新たな光を当てた新作。本展でしか見られない新作を公開します。

○ 本展・本会場内でしか体感できない鑑賞体験

本展・本展覧会でしか見られない会場内のインスタレーション作品など、その場しか感じることのできない鑑賞体験となる展覧会です。作品に込められた記憶や記録を通して、鑑賞者それぞれの物語が生まれることでしょう。

竹中美幸 (Miyuki Takenaka)　美術作家・大垣市出身

多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒業後、同大学大学院美術研究科修了。東京を拠点に活動。主に透明な素材を用いて制作しており、光や影を取り込んだ平面作品やインスタレーションに展開。近年の個展に「陰と陽と」(2022 アートフロントギャラリー/東京)、「都市のさざめき」(2019 新宿パークタワーギャラリー1/東京)など。近年のグループ展に奥能登国際芸術祭 2020+(スズシアターミュージアム/石川)、クインテット Ⅳ 五つ星の作家たち(2018SOMPO 美術館/東京)、シェル美術賞アーティスト・セレクション 2017(国立新美術館/東京)など。

主な受賞歴に 2020 年清流の国ぎふ芸術祭/篠原資明賞、2012 年シェル美術賞/島敦彦審査員奨励賞、トーキョーワンダーウォール 2010/ワンダーウォール賞など。

https://takenakamiyuki.com/

関連企画

1）アーティストトーク

日　時 ／ 2023 年 2 月 4 日（土）、25 日（土）
いずれも 13 時 30 分～
場　所 ／ 大垣市スイトピアセンター　アートギャラリー
参加料 ／ 無料
内　容 ／ 出展作家・竹中美幸より、展示作品や制作についてお話いただきます。

2）ワークショップ「映画用フィルムでしおりをつくろう」制作作品展示

日　時 ／ 2022 年 11 月 26 日（土）～2023 年 3 月 21 日(火・祝)
9 時～17 時
場　所 ／ 大垣市スイトピアセンター　アートギャラリー前通路(学習館 1 階)
内　容 ／ 展覧会に先がけて開催したワークショップ(10/30)に参加した子どもたちが作ったしおり作品とワークショップの記録を展示中。
展覧会出展作品でも使われている映画用 35 ㎜フィルムのオリジナルしおりの版作りを参加者で体験しました。

出品作品一覧（予定）

※2022 年 12 月 7 日現在

○ 新作　2022 年　2023 年

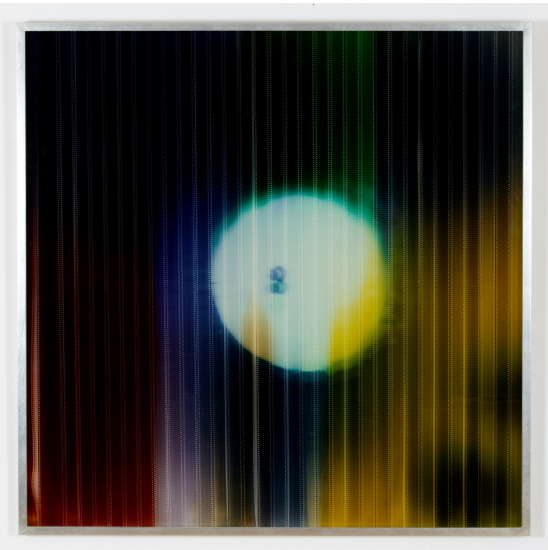
・松尾芭蕉の「奥の細道」から着想を得た平面作品
・大垣で収録をした素材を元に制作した映像作品
・スイトピアセンターコスモドームでかつて使用されていた 70mm 映像フィルムを元に展開させたインスタレーション
・コロナ禍で閉店になる店舗の物を焼き付けた 35mm フィルムを用いたインスタレーション
・ガラスケースの透過を生かした新作インスタレーション

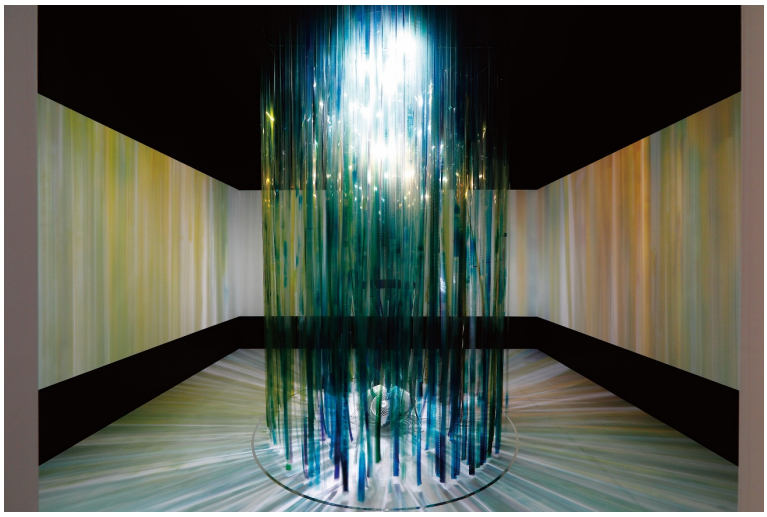
○ 旧作

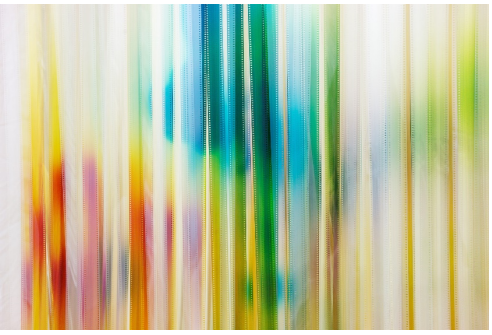
・《新たな物語》　2017 年

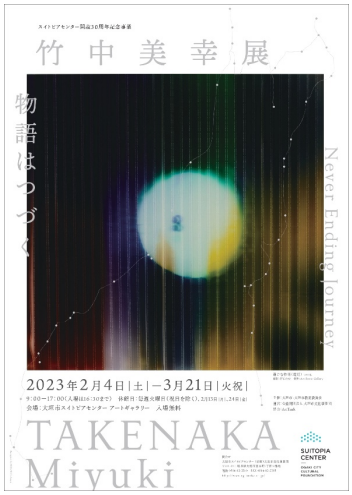
広報用画像について

広報用画像のご提供については、展覧会事務局までお問い合わせください。









1 2

3 4 5

6

7

1 《新たな物語(電灯)》 2017 年
撮影:野口浩史 提供:Art Front Gallery

2 《記憶の音》 2020 年
清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2020
岐阜県美術館 提供:AAIC 事務局

3 《光／闇（部分）》 2015 年

4 《新たな物語（個展）》 2018 年
Art Front Gallery 撮影:品田裕美

5 《記憶に着色》 2022 年
撮影:野口浩史

6 《覗いて、眺めて、》 2021 年
奥能登国際芸術祭 2020+
スズ・シアター・ミュージアム 撮影:木奥恵三

7 展覧会メインヴィジュアル
デザイン:大橋徹也（大垣市出身）

解　説

「透明」という事象は、それ自体が、私たち人間を惹きつける。世界には様々な文化があり、多様な文化と解釈があるものの、少なくとも我々日本人にとって、「透明」とは、美に通じるものと言えるのではないだろうか。海に囲まれ、多くの川と山々が連なるこの国では、水のせせらぎや、空の青さも、透明な美しさを身近なものと感じさせる要素の一つだと思える。

美術家　竹中美幸は、「透明な素材」を用いた表現にこだわってきた。初期には、透明水彩を中心とし、続いてアクリル樹脂や、映画用フィルムへと、素材の幅を広げ、様々な表現に取り組んでいる。従来、画家、写真家、映像作家、陶芸家、彫刻家などと呼ばれる作家達は、技法や、その分野における主たる素材を活かす制作に取り組んできた。一方、現代美術と呼ばれる分野では、さまざまな表現方法や技法、素材を横断的に用い、自らの表現を求め続ける作家達が存在するのが特徴の一つでもあろう。竹中美幸もそうした作家の一人といえる。

では、「透明な素材」という媒体を用いて、竹中が表現するものは、一体何であろうか。

その前に、改めて、「透明」という言葉について、考えてみたい。一般的な意味は「物体が光をよく通し、そのものを通して向こうが見えること」である。つまり、透明は「光」があって、初めて知覚される。柔らかな光が注がれて透明は、美しさを増す。また、竹中が素材とするアクリル樹脂や、映画用フィルムはそれ自体が、透過だけでなく、光を反射する美しさを有している。一方で、透明は、「影」にも通じる。光が当たる先には、影が生じるが、透明においてもそれは同じである。透明な素材を通した影には、柔らかな表情が現れる。「透明な素材」だからこそ、かすかな光と、やわらかな影は、より一層に豊かな表情を宿すのだろう。

話を、竹中の表現するものに戻そう。創作を通じて、光と対話する竹中の生み出す美の形に、具象的な形が宿ったのは、2018 年に発表した「新たな物語」シリーズ以降である。実家の解体にあたり、長年使われた電灯や、椅子など、失われゆくもの達を、同様に現代では使われなくなった映画用フィルムに焼き付け、作品とした。何気ない、日常という物語を記録してきたものたちは、作品となることで、鑑賞者との間につづく新しい物語を紡ぐこととなった。

本シリーズ以降の竹中の作品において、欠かすことが出来ないキーワードは「記憶」と「物語」と言えるだろう。時の流れに埋没し、消えゆくものたち、移り変わってゆくものたちを通して、関わってきた人々の「記憶」を揺さぶり、作品という記録を通して、新たな「物語」を紡いでゆく。ただ、竹中は具象へと作風を変えたわけではない。具象と抽象の間で揺らぐ記憶のように心象を表現しているのだ。作品という媒介を通して、モノ本来の形は曖昧となり、記憶という不確かさや曖昧さをはらんだ心象へと昇華してゆく。曖昧で、やわらかな影をフィルムに写し取られたものたちは、作者や、元の姿を知る人にとっての物語となるとともに、鑑賞者にとっては物語の始まりともなるのである。

大垣市スイトピセンターでの個展にあたり、竹中の表現の手法は、近年のインスタレーション作品で取り入れている光に加え、映像表現にまで及ぶという。「透明」を媒介に表現されるのは、失われゆくものと今とをつなぐ物語であり、それはきっと、私たちの遠い記憶を揺さぶり、新たな物語を紡ぐことになるだろう。　　［村瀬　健：（公財）大垣市文化事業団］

本展覧会に関するお問い合わせ

公益財団法人　大垣市文化事業団　http://www.og-bunka.or.jp/
〒503-0911　岐阜県大垣市室本町 5-51　Twitter / @ogaki_bunka
Tel.0584−82−2310　Fax.0584−82−2305　Mail.　arts-sec@og-bunka.or.jp
担当　/　事業課　事業係　係長：村瀬　係：早﨑